

2000年から、2009年まで、10年間継続して開催してきました「踊りに行くぜ！！」が、今年度から生まれ変わり、新たな目的＜ダンス作品制作環境整備＞に向けて、「踊りに行くぜ！！」Ⅱとしてスタートします！

2011/1/14「踊りに行くぜ！！」 松山公演

作・振付・演出：矢内原美那作品の出演者大募集！！

B/リージョナル・ダンス・クリエイション・プログラム

「踊りに行くぜ！！」Ⅱでは、＜作品を創ることをサポートする新しいシステム＞を全国のパートナーと協働して取り組み、ダンス作品を発表する機会だけではなく、作品創作のサポートをしていくことの面白さと意義を全国的に広げ、日本のダンス作品を豊かにしていく環境をつくっていきたいと思います。

今回の「踊りに行くぜ！！」Ⅱから、既に上演された作品ではなく、これから創ろうとする作品のアイデアを公募し、各地のパートナーと共に選考し、その作品を創り上演することをサポートしていきます。

この松山では、【「踊りに行くぜ！！」Ⅱ B/リージョナル・ダンス・クリエイション・プログラム】において、矢内原美那さん(東京)が、松山在住の方と作品制作を行うダンスアーティストとして選出されました。今回この作品の出演者を応募しますので、出演を希望されるかたは奮って応募ください。この機会により、松山でダンス作品制作＜ダンス イン レジデンス＞の現場が実り多いものになることを、また、この作品が多くの観客の心に残るものになることを願っています。

＜作品内容について＞裏面に作・振付の矢内原美那さんの作品についてのエッセイを記載していますので、ご覧ください。

＜オーディション ワークショップ＞

日時・場所：9/25(土) 15:00～18:00 DANCE STUDIO MOGA

オーディション参加費：1,000円/1人 *14:30までにお越しください。

*身体を動かしやすい服装でご参加ください。／筆記用具をお持ちください。

＜選考方法＞作・振付の矢内原美那さんが、ワークショップを通じて選考します。

＜応募条件＞ある程度のダンス、演劇、パフォーマンス経験がある方。

松山市在住、あるいは、日帰りで通い可能な近隣在住者。

下記の日程に参加できる方。申し込み時点で、参加できない日程がわかっている方は、

応募の際にお知らせください。

＜応募要領＞名前・年齢・性別・住所・電話番号・メールアドレス・ダンス又は演劇の経験(あれば所属)

を明記の上、下記へメール又はFAXでお申し込みください。締切9/21(火)必着

※3日以内に折り返しこちらからご連絡いたします。

連絡が無い場合は、お手数ですが下記までお電話ください。

＜申込み先＞(有)オフィスモガ内「松山・踊りに行くぜの会」

TEL 089-934-3434/FAX 089-934-3441/MAIL matsuyamaodori@yahoo.co.jp

【稽古日程】2010/12/15(水)～24(金) / 2011/1/7(金)～10(月) *10日ショーイング

※平日4時間程度・土日祝8時間程度(時間の詳細はオーディション後に決定します。)

注意)全日参加を原則としますが、調整可能な範囲で応相談

【稽古場所】松山市内

【劇場入り】2011/1/11(火)～14(金)リハーサル等入りますので、終日予定を空けておいてください。

【本番】2011/1/14(金)19:00～予定(場所:ひめぎんホールサブホール)

平成22年度文化庁芸術団体人材育成支援事業

【松山公演主催】松山・踊りに行くぜの会(NPO法人カコア・NPO法人シアターネットワークえひめ・MOGA)

【全体企画・制作・主催】NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク

【共催】(財)愛媛県文化振興財団

【助成】アサヒビール芸術文化財団

【申込・問合せ】(有)オフィスモガ内「松山・踊りに行くぜの会」

TEL 089-934-3434/FAX 089-934-3441/MAIL matsuyamaodori@yahoo.co.jp

作品内容について

文：振付家 矢内原美邦

日本人でありながら、何故バレエなのか、もしくは舞踏なのか、コンテンポラリーダンスなのかわからない私ですが、今はとにかくダンスに疑問を感じながらも、自由なコンポジションで、爆発を繰り返しながらしかも従来のダンスにとらわれないものを創りたいと考えています。

何ができるのか？そのヒントが谷川俊太郎のインタビューのなかではっきりと言葉で書かれていた。

「現代詩は第二次世界大戦後、叙情より批判、具体より抽象、生活より思想を求めて難解になり、読者を失っていった」なるほどと思った。

つまり、「批判より叙情、抽象より具体、思想より生活でないといけない」ということなのです。

最近雑誌の取材でよく聞かれることは『何故舞台をやるのですか？』いつも面倒で『わかりません』と答える。でも、本当はただ生活の一部だからなのだと思う、これをダンスにしたら、言葉にしたらどうなるだろうという習慣のように考え生活し、はずかしながら創造してしまうからだと思う。

私の実家には池があり、松があり、温室まである庭があった。私は庭の草ぬきをよくやらされた記憶があります。祖母と一緒に草ぬきしてと言うので、よくやっていました。草ぬきが面倒で一時期、庭がなくなりますようにと真剣に願いました。草ぬきの嫌いな私をみかね祖母が突然「この庭でなにもしないで植木屋さんだけにおまかせするのは嫌なのよ、この庭はばあちゃんにとっての世界だからね。正岡子規と一緒に、ここ(家)からでる勇氣はないけれど、ここで、こうして世界をみてるから、一緒に草ぬきをして変化を楽しもう」と私に言うのですが意味がわからず、高校生になって庭の草ぬきをすることはなくなりました。

しばらくして祖母が交通事故にあい、病院と自宅療養となり、庭師がいつも庭を綺麗にしてくれていた。その後祖母が亡くなり、温室を庭を壊さなくてはいけなくなり、そこで咲いている花や植物に触れながら写真撮影し、その時初めてそこが世界だと言った言葉の意味が理解できたように思いました。

その写真作品ちいさなフレームにいれて「温室」というタイトルで大原美術館や京都芸術センターで展示しました。ウィリアムブレイクの詩に「一粒の砂に世界を見、一輪の野の花に天国をみる」まさにあの庭が祖母にとってそうで、正岡子規にとっても、私達にとってもそうなのです。

きっと、そうあるべきなのだと確信した。

私が今回松山でのクレーションをどのように考えているかというと、4.5 畳の世界を表現することです。世界が何万畳だとすると私の育った愛媛県や四国は 4.5 畳のようなものです。

私はその 4.5 畳の世界を四国で、四国のみんなと考えて世界に発信してゆくような作品にしたいと考えております。

■矢内原美邦プロフィール■

ニブロール主催。日常の身振りをモチーフに現代の空虚さや危うさをドライに提示するその独特の振付けは国内外での評価も高く、身体と真正面から向き合っている数少ない振付家のひとり。

また2004年に自ら立ち上げたソロプロジェクト・ミクニヤナイハラプロジェクトでは演出家として、演劇にも挑戦し、ジャンルを問わないその活動はニブロールのみならず、多数のアーティストとコラボレーションするなど世界中を舞台に活動中。